

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No149

新著の紹介(コーナー)

新著『授業が変わる学習評価深化論
観点別評価で学力を伸ばす「学びの舞台づくり」』
石井英真先生(京都大学教育学研究科准教授)

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長(2020-2021年)。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています

(ご紹介)



石井 英真
いしい てるまさ

京都大学大学院教育学研究科准教授

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士（教育学）。日本学術振興会特別研究員（PD）、京都大学大学院教育学研究科 助教、神戸松蔭女子学院大学専任講師を経て、2012年4月より現職。

- ・ 専門は教育方法学（学力研究）＝学校ですべきこと、できることについて原理的・実践的に探究（教育的価値論）
- ・ 授業という営みへのこだわり＝ブルームの目標分類学と斎藤喜博の教育美学との間（教育技術論）
- ・ 専門医であると同時に町医者でありたい＝授業改善を軸にした学校改善の取り組み（学校改革実践）



石井先生の著作

- 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。
- 石井英真『中教審「答申」を読み解く』日本標準、2017年。
- 石井英真『再増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2019年。
- 石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。
- 石井英真『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン』日本標準、2020年。
- 石井英真監修・太田洋子・山下貴志編著『中学校「荒れ」克服10の戦略—本丸は授業改革にあった！』学事出版、2020年。
- 石井英真編『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業』日本標準、2017年。
- 石井英真編『アクティブ・ラーニングを超えていく「研究する」教師を育てる』日本標準、2017年。
- 石井英真編『授業改善8つのアクション』東洋館出版社、2018年。
- 石井英真・熊本大学教育学部附属小学校『粘り強くともに学ぶ子どもを育てる』明治図書、2020年。
- 石井英真「教師に求められる学びとは—教師による教師の成長のための実践研究」大阪府教育センター『高等学校研究進め方ガイドブック』2020年。(<http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/pdf/kounaijyugyoujissenk>)
- 石井英真監修・長瀬拓也・秋山貴俊編『ゼロから学べるオンライン学習』明治図書、2020年。
- 石井英真編『小学校 新教科書ここが変わった 算数』日本標準、2020年。
- 石井英真編著『流行に踊る日本の教育』東洋館出版社、2021年。
- 石井英真・鈴木秀幸編著『ヤマ場をおさえる学習評価(小学校編・中学校編)』図書文化、2021年。
- 石井英真・河田祥司『徹底対談・GIGAの中で教育の本質を語る』日本標準、2022年。
- 石井英真編著『高等学校 真正(ホンモノ)の学び 授業の深み』学事出版、2022年。
- 石井英真『中学校・高等学校 授業が変わる学習評価深化論』図書文化、2022年 など



新著のご紹介



石井英真著『授業が変わる学習評価深化論—観点別評価で学力を伸ばす「学びの舞台づくり」』図書文化（2023年1月刊行）

第1章 評価改革の本質を問う
第2章 なぜ観点別評価が強調されるのか
第3章 授業や評価の軸となる目標とは
第4章 「学びの舞台」をどうつくるか
補論 教育評価論のエッセンス
—改革の“今”と“これから”をつかむために

- ① 教育評価に関する理論の展開
- ② 戦後日本の指導要録改訂の歴史

それではご覧ください

5356年2月22日(水)
溝上慎一の教育論 動画チャンネル

『学習評価深化論』の概要

石井英真 (京都大学)

自己紹介

● 専門は教育方法学(学力研究)＝学校ですべきこと、できることについて原理的・実践的に探究(教育的価値論)

● 授業という営みへのこだわり＝ブルームの目標分類学と斎藤喜博の教育美学との間(教育技術論)

● 専門医であると同時に町医者でありたい＝授業改善を軸にした学校改善の取り組み(学校改革実践)

【主な著書】

- 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。
- 石井英真『中教審「答申」を読み解く』日本標準、2017年。
- 石井英真『増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2020年。
- 石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。
- 石井英真『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン』日本標準、2020年。
- 石井英真監修・太田洋子・山下貴志編著『中学校「荒れ」克服10の戦略—本丸は授業改革にあった!』学事出版、2015年。
- 石井英真編『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業』日本標準、2017年。
- 石井英真編『アクティブ・ラーニングを超えていく「研究する」教師を育てる』日本標準、2017年。
- 石井英真編『授業改善8つのアクション』東洋館出版社、2018年。
- 石井英真・熊本大学教育学部附属小学校『粘り強くともに学ぶ子どもを育てる』明治図書、2020年。
- 石井英真「教師に求められる学びとは—教師による教師の成長のための実践研究」大阪府教育センター『高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック』2020年。(http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/pdf/kounaijyugyoujissenkenkyuu_ver_3_r2.pdf)
- 石井英真監修・長瀬拓也・秋山貴俊編『ゼロから学べるオンライン学習』明治図書、2020年。
- 石井英真編『小学校 新教科書ここが変わった 算数』日本標準、2020年。
- 石井英真編著『流行に踊る日本の教育』東洋館出版社、2021年。
- 石井英真・鈴木秀幸編著『ヤマ場をおさえる学習評価(小学校編・中学校編)』図書文化、2021年。
- 石井英真・河田祥司『徹底対談・GIGAの中で教育の本質を語る』日本標準、2022年。
- 石井英真編著『高等学校 真正(ホンモノ)の学び 授業の深み』学事出版、2022年。
- 石井英真『中学校・高等学校 授業が変わる学習評価深化論』図書文化、2022年 など

現代アメリカにおける
学力形成論の展開 **再増補版**

スタンダードに基づくカリキュラムの設計

Development of theories on educational objectives and assessment
in the United States.
Designing standards-based curriculum

石井 英真

Goal Task Structure Arts/Technology Assessment

**授業づくりの
深め方**

「よい授業」をデザインするための5つのツボ

石井英真 著

ミネルヴァ出版

未来の学校

ポスト・コロナの公教育のリデザイン

教育機能や保護機能等において「大きな学校」を追求
すること。公共性と公平性の実現のためにふんばること。
萎縮と不信の連鎖から挑戦と信頼の連鎖へ——

苦境に立ってきた**公立学校**こそ、
「眠れる獅子」の
ような**可能性**を
秘めている! (本書より)

石井英真

日本標準

高等学校

ほんもの

**授業の深み、
真正の学び、**

授業の匠たちが提案するこれからの授業

石井英真 著

中学校・高等学校

授業が変わる

学習評価

石井英真

深化論

観点別評価で学力を伸ばす「学びの舞台づくり」

煩わしいだけの学習評価じゃもったいない
知識の暗記・再生を超えて、
現実の文脈で「生きて働く学力」を育成するために

図書文化

GIGAスクールのなかで

教育の本質を問う

子ども主題の学びと現場主題の改革へ

1人1台端末の先に見える教育の姿とは?
教育界をリードする二人が
熱く語り尽くした780分!!

京都大学准教授 石井英真

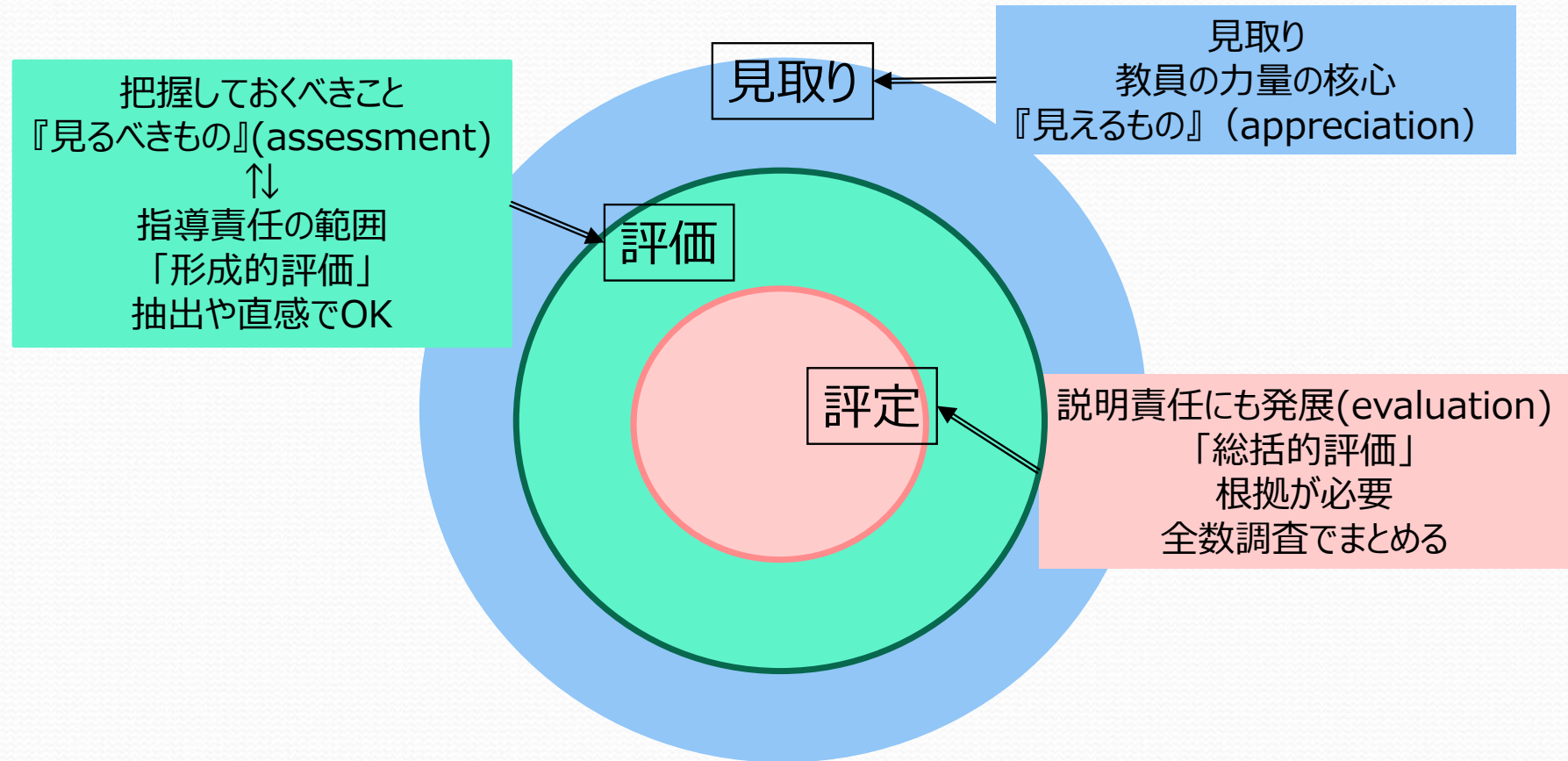
遠く年輪を教育センター 河田祥司

日本標準

学習評価改革を進めていく上での羅針盤

- ・ 形成的評価と総括的評価を区別し評価材料を集める場面を重点化する(「指導の評価化」に陥らない)。
- ・ 評価は授業の鏡、観点別評価を「学びの舞台」づくりにつなげる(「テスト7割、平常点3割」の再構築)。
- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」は「出口の情意」(試行錯誤、工夫、問いの生成・展開)として捉え、「思考・判断・表現」の充実を本丸にする(情意の評定を管理の道具にして学校を息苦しくしない)。
- ・ 「間主観性」から評価(改善)・評定(説明責任)の在り方を見直す(事例をもとに生徒の見る眼を育て、評価結果への納得感をつくる)。

形成的評価と総括的評価、評価と評定の違いを区別する



授業では、「形成的評価」として子どもを全体で把握しつつ、一人ひとりをしっかりと伸ばす。そして、単元末や学期末など、しっかりと伸ばし切ったところで、確実に身に付いたかを全数調査（学びの舞台）でしっかりと確かめて評定（＝「総括的評価」）する。

時間	ねらい(■)、言語活動等(丸数字)	知	思	能	備考
1	<p>■単元の目標を理解する。</p> <p>■教科書の対話文を読み、引用するなどしながら考えたことや感じたことを伝え合う。</p> <p>①自己目標を設定する。</p> <p>②教科書の対話文を読み、読み取れた内容に関する自分の考えや感じたことをペアで伝え合う。</p> <p>③対話文で使われている未知の語の意味や受け身の構造と意味を理解する。</p> <p>④英文を引用するための英語表現を学ぶ。(Student A says, “～.” According to student A, … など)</p> <p>⑤再度、対話文の内容に関して、引用しながら考えや感想などを別のペアで伝え合う。</p> <p>⑥ペアで話した内容を踏まえ自分の考え等を書く。</p>				<p>・自分の考え等を伝える際は、語句ではなく文で伝えさせる。</p> <p>・後日行うパフォーマンステストに向け、「帯活動」で、身近な話題に関する「話すこと〔やり取り〕」の言語活動(Small Talk)に取り組みせ、相手の話に関わらせて質問したりさせる。</p> <p>・第2、3時の学習の振り返りは適宜行わせる。(自己目標の設定や振り返りのさせ方などについては事例5参照)</p>
2	<p>■対話文を読み、引用するなどしながら、考えたことや感じたことを伝え合う。</p> <p>①受け身を使って作成された教科書本文とは別の対話文を読み、引用しながら、考えたことや感じたことを受け身の英文を使ってペアで伝え合う。</p> <p>②再度、対話文の内容に関して、引用しながら考えや感想などを別のペアで伝え合う。</p> <p>③ペアで話した内容を踏まえ自分の考え等を書く。</p>				
3	<p>■教科書の対話文(第1時で読んだ対話文の続き)を読み、引用するなどしながら考えたことや感じたことを伝え合う。</p> <p>①教科書の対話文を読み、読み取れた内容に関する自分の考えや感じたことをペアで伝え合う。</p> <p>②対話文で使われている未知の語の意味や現在完了形(肯定文)の構造と意味を理解する。</p> <p>③前時までに学んだ引用方法を確認し、それを意識して再度、対話文の内容に関して、引用しながら考えや感想などを別のペアで伝え合う。</p> <p>④ペアで話した内容を踏まえ自分の考え等を書く。</p>				
4	<p>■対話文を読み、引用するなどしながら、考えたことや感じたことを伝え合う。</p> <p>①現在完了形(完了用法・肯定文)を使って作成した教科書とは別の対話文を読み、引用などしながら、考えたこと</p>				

らすこと記録
ないとは徒に
う毎の残
十時活す
分間動評
留必の備
意す状は
行況行
うをわ
「活
動にた
見だ
させ
てけ
てい
る指
ねら
けに
生に
なか

	や感じたことなどをペアで伝え合う。 ※②以降は第3時の③、④と同じ。				
5	<p>■教科書の対話文とレポート(第3時で読んだ対話文の続き)を読み、引用するなどしながら考えたことや感じたことなどを伝え合う。</p> <p>①教科書の対話文とレポートを読み、引用しながら自分の考えや感じたことなどをペアで伝え合う。</p> <p>②対話文等が使われている未知の語の意味や現在完了形(完了用法、否定文・疑問文)の構造と意味を理解する。</p> <p>※③以降は第3時の③、④と同じ。</p>				
6	<p>■対話文や文章を読み、引用するなどしながら、考えたことや感じたことなどを伝え合う。</p> <p>①現在完了形(完了用法の否定文、疑問文)を使って作成した教科書とは別の対話文や文章を読み、引用しながら考えたことや感じたことなどをペアで伝え合う。</p> <p>※②以降は、第3時の③、④と同じ。</p>				
7	<p>■ピクチャー・カードを使い、受け身や現在完了形などを正しく用いながら、教師やALTに教科書の全ての本文内容について説明する。</p> <p>①ペアになり、相手を教師やALTにみたてて、教科書本文内容についてピクチャー・カードを使いながら説明する。</p> <p>②一人一人が教師やALTに教科書本文内容を説明する。</p>				・「注」①、②参照
8	<p>■初見の文章を読み、引用するなどしながら考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合う。</p> <p>①スピーチ原稿を読み、考えなどをペアで伝え合う。</p> <p>②ペアで話した内容を書く。</p> <p>③自己目標の達成状況を振り返り、次の課題を明確にする。</p>				・「注」③参照
後日	パフォーマンステスト				本事例「5」参照

記録に残す評価は行わない。ただし、ねらいに即して生徒の活動の状況を確認に見届けて指導に生かすことは毎時間必ず行う。活動させているだけにならないよう十分留意する。

評価すれども記録せず

国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校外国語』2020年、50-51頁。

注：
 ①教師は1回につき4人(2ペア)を観察し、「知識・技能」の評価規準に照らして、受け身や現在完了形を使用しなくてはならない文脈で用いることができるかを観察する。
 ②本事例では「話すこと〔やり取り〕」であるため当該領域の言語活動により本単元で扱う言語材料を用いて自分の考えなどを伝え合う技能を身に付けているか否かを評価する。他方、他の領域に焦点を当てた単元の場合、当該領域の言語活動により当該単元で扱う言語材料に関する「知識・技能」を評価することになる(「読むこと」は事例2、「聞くこと」は事例3、「書くこと」は事例4をそれぞれ参照)。
 ③以下のとおり評価する。
 ・初見の文章を読み、読んだことについて、引用するなどしながら考えたことや感じたことなどをペアで3分程度伝え合う。その後、ペアを複数回変え、やり取りをさせる。
 ・教師は1回につき、4人(2ペア)を観察し、本課の評価規準(「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」)に照らして評価する。十分な発話がない生徒がいた場合には、新しいペアにおけるやり取りを観察する。
 ・第8時の観察の結果を本課の評価情報として極力記録に残すようにする。「知識・技能」の評価については、現在完了形や受け身の使用がみられなかった場合、第7時の観察の結果を加味することが考えられる。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については第8時だけに限らず日々の授業における言語活動への取組状況を勘案する。(事例5参照)

「現代の日本と世界の諸課題」の指導計画

(○…「評定に用いる評価」、●…「学習改善につなげる評価」)

	学習活動	評価の観点		評価規準等
		知	思・態	
4 時 間 扱 い	<p>主権や人権、平和などに関わる現代社会の諸課題について、これまで学んできた歴史の大きな流れの中で考察し、自分の考えや意見をまとめよう。その意見について互いに話し合う中で、よりよい社会の実現に向けて、続けて追究したい「問い」を提案しよう。</p>			
	<p>① 「問い」をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの歴史的分野の学習を振り返り、主権や人権、平和などに関わる現代社会の諸課題をグループで話し合い、「なぜ」「どのように」につながる問いの形で表現する。 グループでの話し合いを参考にして、それぞれ自分の追究したい「問い」を設定する。 <p>② 情報を収集し、「問い」を見直す</p> <ul style="list-style-type: none"> ①の自分の「問い」について、歴史的経緯や現代への影響などの情報を収集して自分の考えを深め、「問い」を再設定する。 <p>③ 考察、構想した内容を表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> 「問い」について考察し、その結果を踏まえ、よりよい社会の実現に向けてその課題を解決するために必要であると考えることをレポートに表現する。 <p>④ レポートの成果を発表し、今後も追究し続けたい「問い」を設定する</p> <ul style="list-style-type: none"> レポートをグループで発表し、意見交換を行い、そこでの意見を踏まえ、自分が設定した課題の解決に向けて、今後も追究したい「問い」を提案する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ● ○ ○ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 読み取った情報や、話し合いの結果を活用して、自ら「問い」を考察し、表現している。 ● 時期や年代、比較、相互の関連や過去と現在とのつながりなどに着目して、「問い」を再度考察して設定し直し、表現している。 ○ 現代の課題について、視点をもって整理し、歴史的な経緯を踏まえて、根拠を基に考察し、よりよい社会の実現に向けて構想し、表現している。 ○ 現代の課題を考え続ける姿勢をもつことの大切さに気付き、公民的分野の学習へのつながりを見いだそうとしている。 	

学習改善の評価と評定とを分けて重点化

国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校社会』2020年、70頁。

学習評価改革を進めていく上での羅針盤

- ・ 形成的評価と総括的評価を区別し評価材料を集める場面を重点化する(「指導の評価化」に陥らない)。
- ・ 評価は授業の鏡、観点別評価を「学びの舞台」づくりにつなげる(「テスト7割、平常点3割」の再構築)。
- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」は「出口の情意」(試行錯誤、工夫、問いの生成・展開)として捉え、「思考・判断・表現」の充実を本丸にする(情意の評定を管理の道具にして学校を息苦しくしない)。
- ・ 「間主観性」から評価(改善)・評定(説明責任)の在り方を見直す(事例をもとに生徒の見る眼を育て、評価結果への納得感をつくる)。

学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「**社会に開かれた教育課程**」の実現

各学校における「**カリキュラム・マネジメント**」の実現

何を学ぶか

どのように学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

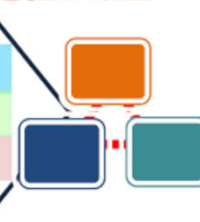
小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

主体的・対話的で深い学び（「**アクティブ・ラーニング**」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



※高校教育については、些末な事象的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

新しい学力・能力が強調される背景

- 第四次産業革命期ともいわれる、変化の激しい現代社会、労働者として、また、生活者や市民として、さまざまな文脈で他者と協働しながら「正解のない問題」に対応する力や、生涯にわたって学び続ける力など、高度な知的・社会的能力が必要とされてきている。
- ドリブルやシュートの練習(ドリル)がうまいからといってバスケットの試合(ゲーム)で上手にプレイできるとは限らない。ゲームで活躍できるかどうかは、刻々と変化する試合の流れ(本物の状況)の中でチャンスをものにできるかどうかにかかっており、そうした感覚や能力は実際にゲームする中で可視化され、育てられていく。ところが、従来の学校において、子どもたちはドリルばかりして、ゲーム(学校外や将来の生活で遭遇する本物の活動)を知らずに学校を去ることになってしまっている。
→「真正の学習(authentic learning)」「(本物の学び)」の必要性。

その教科の一番おいしいプロセスを子どもたちにゆだねる「教科する(do a subject)」授業へ(質が高くてかつ、深く重い学びへの志向性)。

表. 学力・学習の質的レベルに対応した課題例、および適合的な教具とメディアの使用法

	教具とメディアの使用法	国語	社会	数学	理科	英語
「知っている・できる」レベル	問題集とドリルプリント AIによる個別最適化学習のためのタブレット	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計器の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りをする。
「わかる」レベル	教科書、黒板とノート、ホワイトボードとワークシート 電子化された教材パッケージ、電子黒板、ノートやホワイトボードやワークシートとしてのタブレット	論説文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテキストの記述から想像する。	扇状地に果樹園が多い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起こるか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適用問題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で説明する。	教科書の本文で書かれている内容を把握し訳す。 設定された場面で、定型的な表現などを使って簡単な会話をする。
「使える」レベル	史・資料、ホンモノの物や人や文献 情報収集・分析・表現やコミュニケーションのツールとしてのタブレット	特定の問題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえながら自分の考えを論説文にまとめる。そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論評する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前のどこに出店すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万本当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題をつくり、追究の過程と結果を数学新聞にまとめる。	クラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けられない。その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読んでポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分担して演じ、発表会を行う。

※機器やソフトではなく機能で考える。同じ機能が果たせるのであれば、より原初的な教具に戻して考えてみる。

テクノロジーを生かしたイノベーションというとき、効率性志向の既存の作業や生活のスマート化のみならず、教科の専門性と結び付けて学びの質を高めたり、社会的活動と結び付けてフラット化や民主化につなげたりする視点も重要だろう。

。

各教科の真正の課題のパターン

	社会	理科	数学	英語	国語
社会的・実用的文脈	<p>論争的な社会問題について、根拠をもって判断し、自らの主張や解決策を考える。</p> <p>例：日清・日露戦争などを振り返り、なぜ戦争が起こったのか、避けられなかったのかを検討し、戦争を防ぐために大切なことを提案する。地元の過疎化対策を提言する。</p>	<p>日常的な自然事象を科学的に説明したり、科学技術が関係する実社会の課題について判断し解決策を考えたりする。</p> <p>例：免疫のメカニズムをふまえて、エイズの特効薬について予想する。火事で破壊された森の植林計画について自然生態系への影響を判断する。</p>	<p>現実世界の事象や問題を数学化し、問題を解決したり変化を予測したりする。</p> <p>例：文化祭でたこ焼き屋を出店するのに、過去のデータから一定の利益を上げつつ安い価格を設定する。データをもとにCO₂排出量を予想するモデルを考案し、地球温暖化を考える。</p>	<p>日常生活で直面しそうな場面で、相手意識をもって自分の言いたいことを英語で表現し伝え合う。</p> <p>例：地元の商店街に配布すべく、地元の観光食べ歩きマップを使った英語での会話問答集を作成する。オンラインでつないで海外の姉妹校の生徒に日本のおすすめスポットを紹介する。</p>	<p>実用的テキストを読み解き作成したり、他者と論理的に意思疎通したり議論したりする。</p> <p>例：読書を推進するための取り組みを全校生徒に提案するために、資料やデータを収集・参照したりしながら、自分の考えをまとめる。社会問題について討論する会を開く。</p>
学問的・文化的文脈	<p>事象や史料を批判的に読み解き、根拠を明らかにしながら解釈や結論を導き出す。</p> <p>例：アニメの舞台のモデルがどの地域なのかを自然環境や人間描写などから推理する、異なる立場から書かれた史料を読み比べて、解釈の別れる歴史上の出来事の真相を探る。</p>	<p>問いや仮説を検証するために必要な実験手順を考えたり、事実から得られたことを考察したり、さらなる検証手順を考えたりする。</p> <p>例：静止摩擦力について学んだあと、動摩擦力について調べる実験を計画・実施し結果を考察し、実験を練り直す。</p>	<p>数学的な問題や命題を論証し、筋道立てて説明し、統合的・発展的に問いを見出す。</p> <p>例：三角形の面積を求める様々な公式の論証過程をわかりやすく説明・表現する。教科書の例題や適用題から数値や条件を変えて問題をつくり、算額風にその解答と解説を作成する。</p>	<p>英語で書かれた専門的なテキストを読み解き、パブリックな場面で論理的に議論を組み立て、コミュニケーションする。</p> <p>例：教科書本文の内容と、それと異なる見解を記した英文を読み比べ、英語で各テキストの内容を要約しつつ、自分の意見を論理的にエッセイにまとめる。</p>	<p>学問的・古典的テキストについて、複数のテキストを読み比べたりしながら、解釈や主題への理解を深める。</p> <p>例：教科書のテキストと関連するテキストを素材に、その主題に関して、論拠を挙げて意見文をまとめる。古文の一場面をグループで劇化する。</p>

内容知優勢

方法知優勢

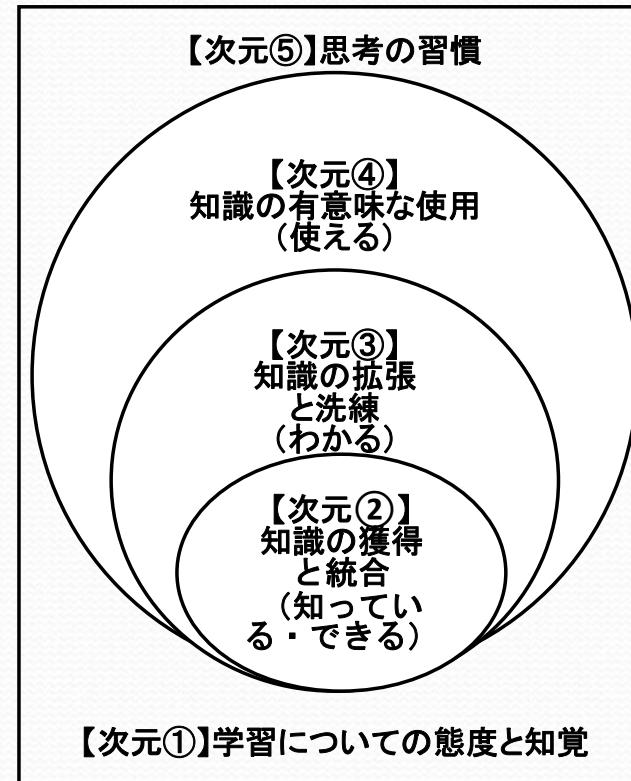
教育目標設定の枠組みに見る学力の質的レベル

知識次元	認知過程次元					
	1. 記憶する	2. 理解する	3. 適用する	4. 分析する	5. 評価する	6. 創造する
A. 事実に知識	■	■	■	■	■	■
B. 概念的知識		■	■	■	■	■
C. 手続的知識			■	■	■	■
D. メタ認知的知識				■	■	■

① 「改訂版タキソノミー (Revised Bloom's Taxonomy)」の枠組み (出典: O ㄗ ㄗDqghuvrq #dqg #E ㄗ ㄗN udwkz rk # hgvl #D #N d {rqrp | #ru #D hduq lqj / #W h d f k l q j / #dqg # D v h v l q j #D #J h y l v l r q # i #E a r r p U #N d { r q r p | # i # H g x f d w l r q d o R e m h f w l y h v / #D r q j p d q / #5334 / s 15 ; 1)

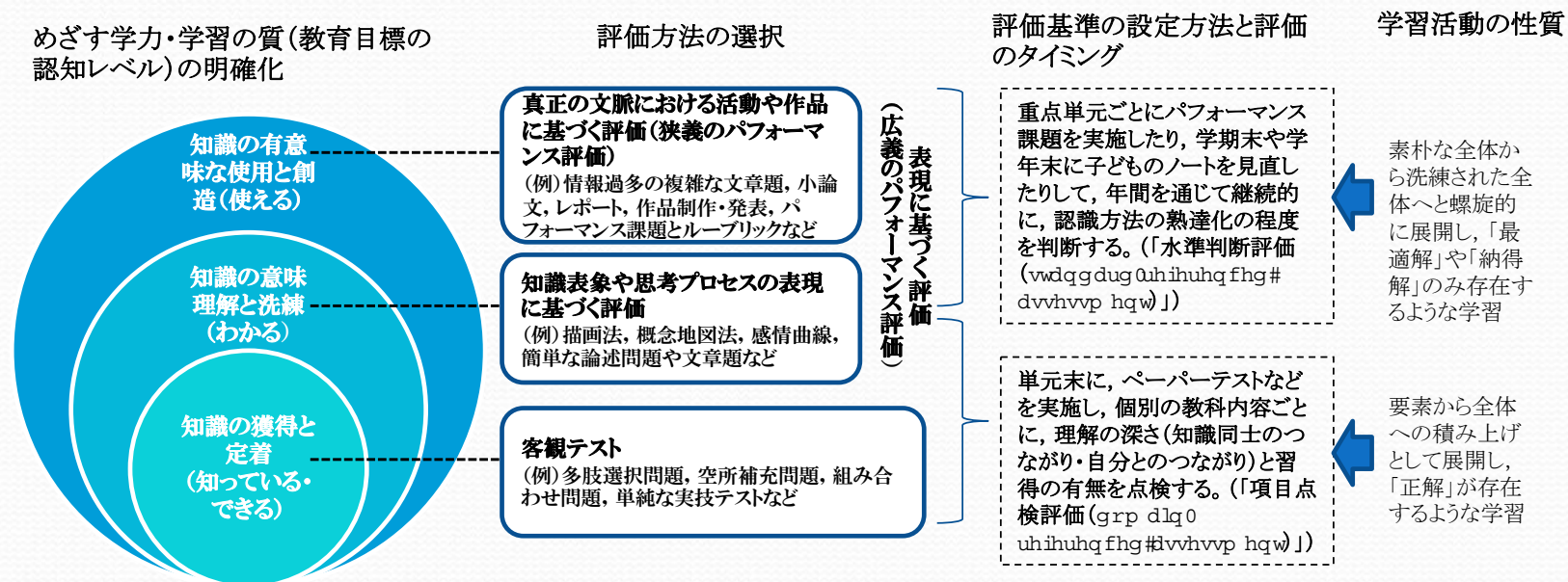
事実に知識 Knowledge	個別的スキル Skills
転移可能な概念	複合的プロセス
原理と一般化 Understanding	

③ 「知識の構造」の枠組み (出典: J. McTighe and G. Wiggins, *Understanding by Design Professional Development*, ASCD, 2004, p.65の図からそれぞれの知識のタイプに関する定義や説明を省いて簡略化した。)



② 「学習の次元 (Dimensions of Learning)」の枠組み (出典: U 1 M 1 P du}dqr / D G liuhqw N lqg ri F a d w u r r p = W h d f k l q j z l w k G l p h q v l r q v ri O h d u q l q j / D V F G / 4 < < 5 / s 1491 番号は発表者。)

学力・学習の質と評価方法との対応関係



(出典:石井英真「学力向上」篠原清昭編著『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房、5345年。)

「考える力を育てるかどうか」という問い方ではなく、「どのレベルの考える力を育てるのか」という発想で考えていかねばならない。特に、内容の習得をめざす中での思考力と、学んだことをつなぎあわせて文脈に対応して使われる思考力とのレベルの違いを認識しておく必要がある。

c. f. ブルームの目標分類学における、「適用(application)」（特定の解法を適用すればうまく解決できる課題）と「総合(synthesis)」（論文を書いたり、企画書をまとめたりと、これを使えばうまくいくという明確な解法のない課題に対して、学んだ知識を総動員して取り組まねばならない課題）という「問題解決」のレベルの違い。

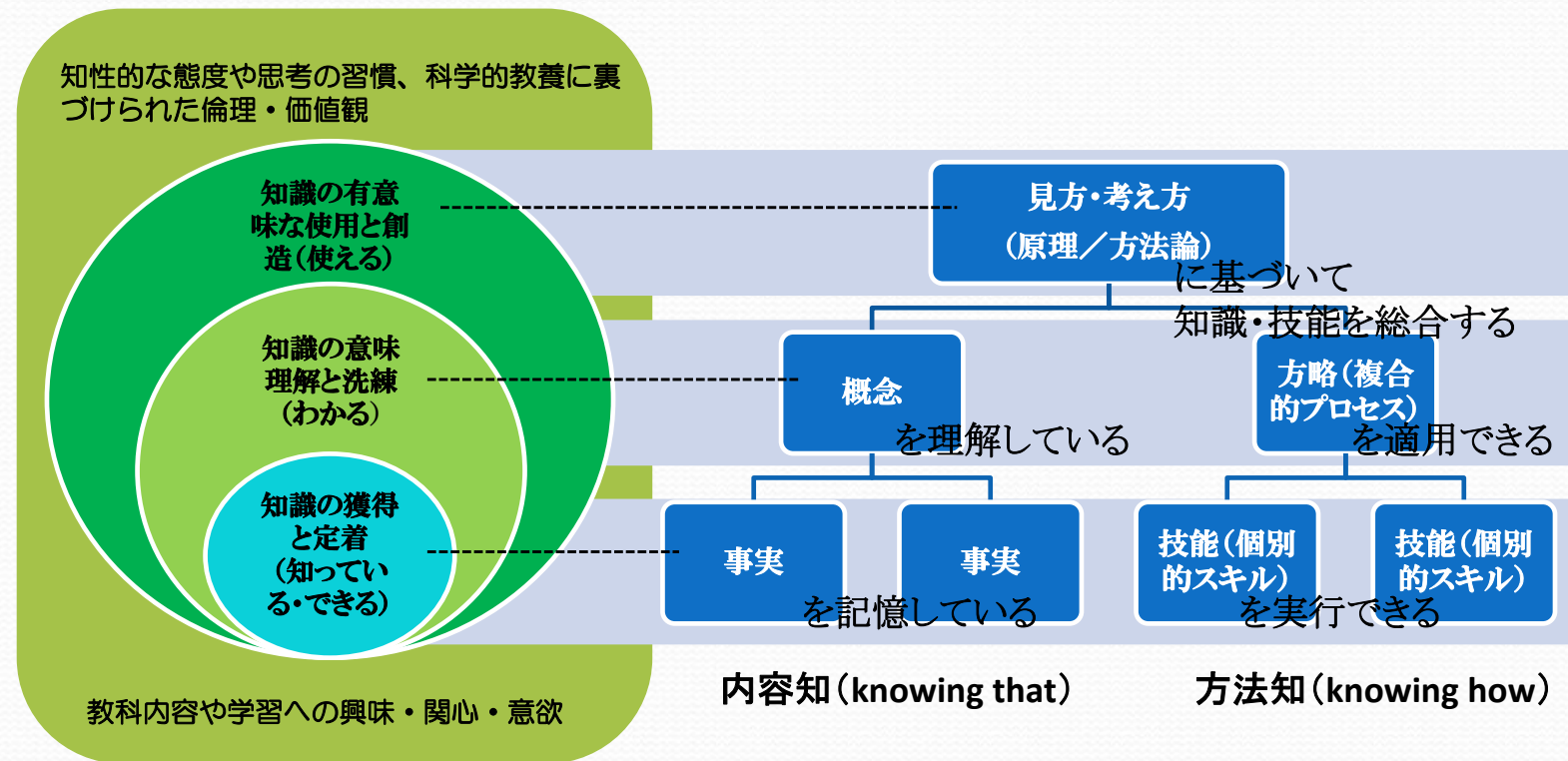


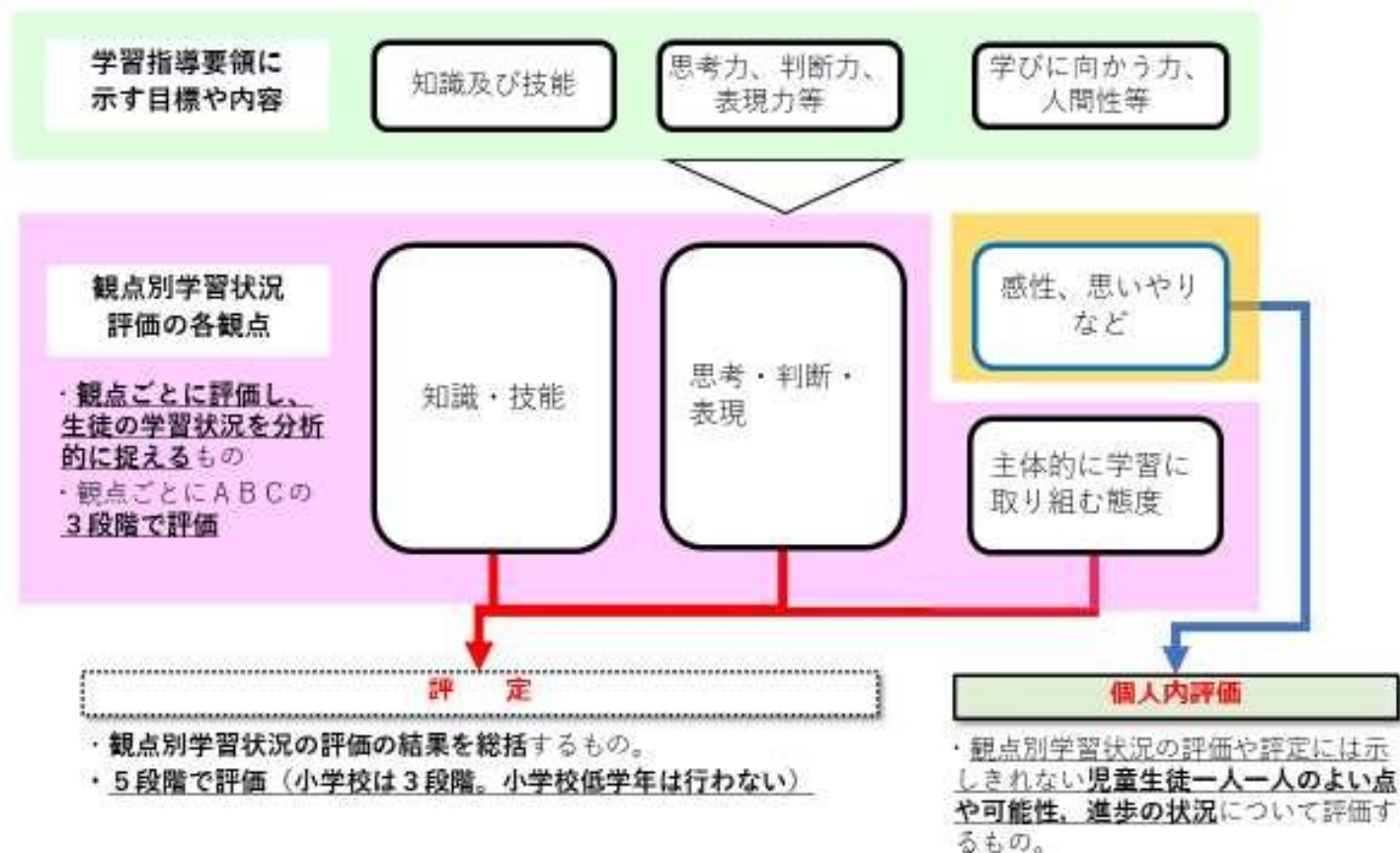
図1. 学力・学習の質的レベルと「知の構造」(出典:石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。)

学習評価改革を進めていく上での羅針盤

- ・ 形成的評価と総括的評価を区別し評価材料を集める場面を重点化する(「指導の評価化」に陥らない)。
- ・ 評価は授業の鏡、観点別評価を「学びの舞台」づくりにつなげる(「テスト7割、平常点3割」の再構築)。
- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」は「出口の情意」(試行錯誤、工夫、問いの生成・展開)として捉え、「思考・判断・表現」の充実を本丸にする(情意の評定を管理の道具にして学校を息苦しくしない)。
- ・ 「間主観性」から評価(改善)・評定(説明責任)の在り方を見直す(事例をもとに生徒の見る眼を育て、評価結果への納得感をつくる)。

各教科における評価の基本構造

- ・各教科における評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況进行评估するもの（目標準拠評価）
- ・したがって、目標準拠評価は、集団内での相対的な位置付けを評価するいわゆる相対評価とは異なる。



※この図は、現行の取扱いに「答申」の指摘や新しい学習指導要領の趣旨を踏まえて作成したものである。

「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(2019年1月)

表. 情意の諸相と育成の方法論(出典:石井英真『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のデザイン』日本標準、2020年。)

	情意の中身	育成方法
入口の情意	真面目さや積極性としての授業態度、興味・関心・意欲、一般的な学習方略(勉強法的な学び方)(例:勉強への粘り強さ:努力と忍耐)	授業の工夫による喚起の対象、継続的な訓練と習慣化の対象(学習の前提条件)
出口の情意	知的な試行錯誤や工夫の過程に見られる、教科の見方・考え方を働かせながら思考しようとする態度、深く認識した結果生じる視座や価値や行動の変容(例:教科への粘り強さ:熟慮と批判性・やりたいことの拡大)	教科の意識的・系統的な指導によって、内容を伴って伸長させていく対象(教科の目標:ねらい)
	問題解決を成功に導く思考の習慣、キャリアイメージの拡大・深化、市民としての社会的責任の意識・倫理・価値観など、人間的な成長・成熟に関わる価値や行動の変容、思想(軸)の形成(例:人生における粘り強さ:志やしぶとさ・社会性を伴ったなりたい自分の拡大)	学校生活のあらゆる場面で追求し続け、文化化によってじわじわと個人の中に育まれ根付いていくヴィジョン(学校教育目標:ねがい)

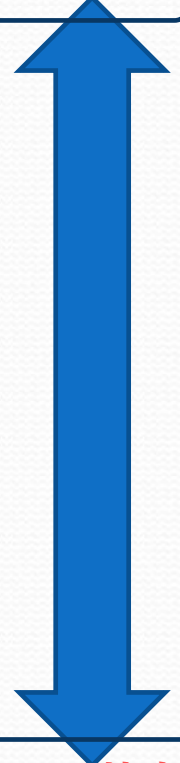
※観点別評価(目標に準拠した分析評定)の対象とすべきは、教科に即した「出口の情意」であり、パフォーマンス課題等の問いと答えの間の長い評価課題により、「思考・判断・表現」とセットで評価することが有効である。

※マクロな学校経営については、価値追求的に、ミクロな単元・授業改善については、目標達成的に考える。学校教育目標としてのヴィジョン(ねがい)は学校の構成員を結びつけてつながりや文化を創出することに、教科目標や観点別評価の観点(ねらい)は学習成果を保障することにつなげるものである。

表.「主体性」のタキソミー(関与と所有権の拡大のグラデーション)(筆者作成)

特別活動	自治(変革人:エージェンシー)	社会関係を創りかえる
		対象世界を創りかえる
総合学習	人間的成熟(なりたい自分:アイデンティティ)	軸(思想)の形成
		視座の高まり
総合学習	自律(探究人:こだわり)	自分事への問いの深化
		問いの生成
教科学習	学び超え(生涯学習者・独立的学習者)	思考の習慣(知的性向)
		関心の広がり
教科学習	学習態度(自己調整学習者・知的な初心者)	方略的工夫
		試行錯誤
教科学習	関心・意欲	積極性(内発的動機づけ)
教科学習	表面的参加	受身(外発的動機づけ)

出口の情意



入口の情意

小学校 家庭科

題材名

「できるよ、家庭の仕事」 A-(2)、(4)

題材目標

学んだことを生かして自分にできる家庭の仕事について日常生活から問題を見出し、課題を設定し、様々な解決方法を考えて、実践した結果を評価・改善し、考えたことを表現するなどして、課題を解決する力を身に付ける。

題材の学習計画

第1次①自分にできる家庭の仕事について考える。課題設定

(これまでの学習で学んだことや家庭で行っている仕事について振り返りできるようにしたことを発表する)

②家庭の仕事についてタブレットし調べ自分の家庭にあった方法を考える 課題解決の方法を考える

第2次③実践してきたことについて自己評価し、中間の振り返りをする。

保護者のコメントをもとにして改善方法を考える。評価・改善

④自分の実践を発表し、友達とアドバイスし合い改善方法を考える。

⑤実践した結果を評価・改善し新たな課題を見つけ次の実践に取り組む。新たな課題の発見

題材計画と評価計画（場面・方法）の必要性

第1次①課題設定

★知・技

思・判・表

②課題解決の方法を考える



主体的に学習に取り組む態度

第2次③評価・改善



④評価・改善



⑤新たな課題の発見



★★が記録に残す評価（総括的評価）



は指導に生かす評価（形成的評価）

具体的な姿を基準にしたものがルーブリック

この題材のヤマ場（
課題）
は一体どこか

本時のルーブリック (ポイント表と予備的ルーブリック)

できるよ、家庭の仕事

	★★★	★★	★
思考・判断・表現	複数の課題を見出し、それらの解決する方法を具体的にわかりやすく書くことができた。	複数の課題を見出し、それらの課題を解決する方法を書くことができた。	課題を見出し、課題を解決する方法を書くことができた。
主体性	これからも仕事をずっと続けていくためにどうしたら良いのか、友だちの意見を聴くなどして、今後の生活を改善したり、生活を工夫し、家庭で実践しようとしている。	友だちの意見を聴くなどして、今後の生活を改善したり、生活を工夫し、家庭で実践しようとしている。	生活をよりよくしようと、実践をふり返り、今後の生活を改善しようとしている。

	友だちからのアドバイスを受けて、次の実践で意識したいこと	<p>友だちからどんなアドバイスを受けて、取り入れようと思ったのか。</p> <p>A: 自分はいつも「バスマジックリン」を使い、洗剤をかけた後に力を入れてこすっていたけれど、<u>〇〇さんからのアドバイスで、洗剤にはたくさん種類があり、浴室の床のぬめりを取るには、アルカリ性の洗剤を用いることが効果的であることを知ったので、次のときには、アルカリ性の洗剤を使って掃除をし、効果があれば続けていきたいと思っています。</u></p> <p>B: <u>〇〇さんからのアドバイスで、洗剤には中性以外にもアルカリ性などがあることを知ったので、次の実践のときには、それも使って掃除をしてみたいと思います。</u></p> <p>C: 洗剤にはたくさん種類があることを知った。(友だちの意見やアドバイスから改善方法が考えられていない。)</p>
--	------------------------------	--

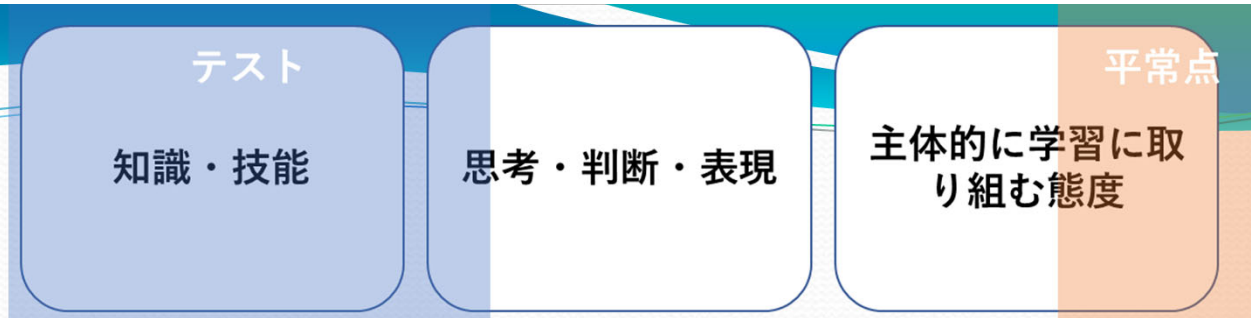


図. テスト一発勝負と平常点による救済の構造（中学校・高等学校で多い）

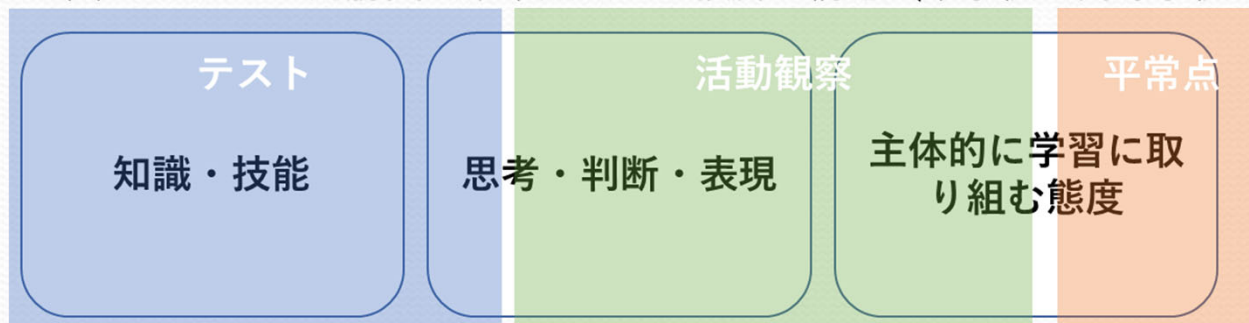


図. テストと活動観察と平常点による「指導の評価化」の構造（小学校で多い）

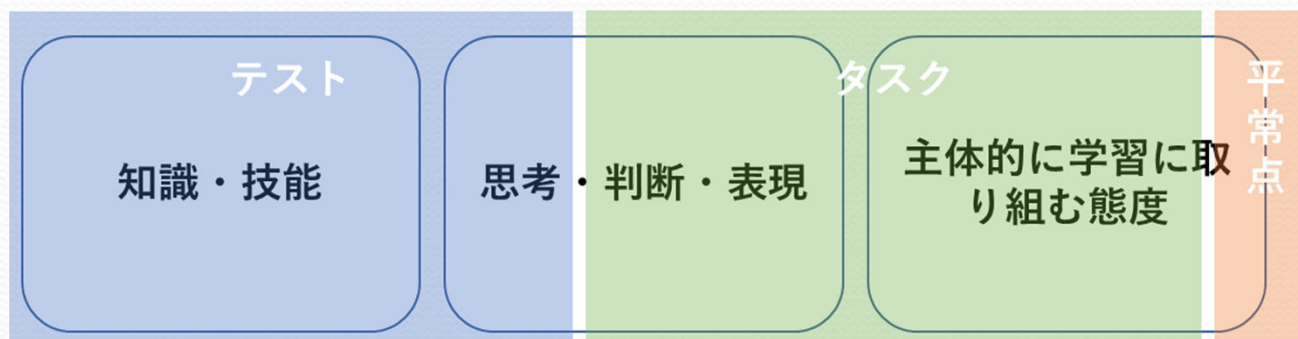


図. テストとタスクを主軸とする構造（観点別評価の本来の形）

表.「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」とを一体的に評価する方向へ

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
授業態度寄り(平常点的な主体性)	定期考査	定期考査、ワークシート	出席、ノート、提出物
学習への取り組みと変容(学び方的な主体性)	定期考査・単元テスト	定期考査、パフォーマンス課題	学びの振り返りとプレポスト比較(一枚ポートフォリオ的)
パフォーマンス課題での試行錯誤(試行錯誤・工夫的な主体性)	定期考査・単元テスト	定期考査・パフォーマンス課題 (課題に対する思考の質:(例)作成された文章の論理構成や説得力) (単元内容に即した問いと思考:(例)「島原の乱の真相は何だったのか?」)	パフォーマンス課題・課題への取り組みの振り返り (課題への向き合い方:(例)表現や論述において工夫した点やこだわった点の振り返り) (学びの意味に関わるメタな問いと思考:(例)「宗教が弾圧を受ける条件は何か?」)
パフォーマンス課題からの学び超え(課題発見的・探究的な主体性)	定期考査・単元テスト	定期考査・パフォーマンス課題	パフォーマンス課題からの発展的な問いや学びの意味に関するレポート(学びんだことを生かそうとする、自分事として捉えようとする、新たに問いを立てようとする)

※ 下に行くほど、より出口の情意を対象とするものとなっている。

(3) 各観点の評価場面の設定

単元	評価の観点と評価方法		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元Ⅰ	↓ 小テスト (筆記・実技)	↓	↓ ノート(内容) 振り返りシート
	パフォーマンス課題		
単元Ⅱ	↓	↓	↓ ノート(内容) 振り返りシート
	中間考査		
単元Ⅲ	↓ 小テスト (筆記・実技)	↓	↓ ノート(内容) 振り返りシート
	パフォーマンス課題		
単元Ⅳ	↓	↓ レポート課題	↓ ノート(内容) 振り返りシート
	期末考査		

大阪府教育庁教育振興室 高等学校課「新高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえた「観点別学習状況の評価」実施の手引き 説明会」資料

学習評価改革を進めていく上での羅針盤

- ・ 形成的評価と総括的評価を区別し評価材料を集める場面を重点化する(「指導の評価化」に陥らない)。
- ・ 評価は授業の鏡、観点別評価を「学びの舞台」づくりにつなげる(「テスト7割、平常点3割」の再構築)。
- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」は「出口の情意」(試行錯誤、工夫、問いの生成・展開)として捉え、「思考・判断・表現」の充実を本丸にする(情意の評定を管理の道具にして学校を息苦しくしない)。
- ・ 「間主観性」から評価(改善)・評定(説明責任)の在り方を見直す(事例をもとに生徒の見る眼を育て、評価結果への納得感をつくる)。

評価を指導に生かすとはどういうことか？

(出典:石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。)

アプローチ	目的	準拠点	主な評価者	評価規準の位置づけ
学習の評価 (assessment <u>of</u> learning)	成績認定、卒業、 進学などに関する 判定(評定)	他の学習者 や、学校・ 教師が設定 した目標	教師	採点基準(妥当性、信頼 性、実行可能性を担保すべ く、限定的かつシンプルに 考える。)
学習のための 評価 (assessment <u>for</u> learning)	教師の教育活動 に関する意思決 定のための情報 収集、それに基づ く指導改善	学校・教師 が設定した 目標	教師	実践指針(同僚との間で 指導の長期的な見通しを共 有できるように、客観的な評 価には必ずしもこだわらず、 指導上の有効性や同僚との 共有可能性を重視する。)
学習としての 評価 (assessment <u>as</u> learning)	学習者による自 己の学習のモニ ターおよび、自 己修正・自己調 整(メタ認知)	学習者個々 人が設定し た目標や、 学校・教師 が設定した 目標	学習者	自己評価のものさし(学 習活動に内在する「善さ」 (卓越性の判断規準)の中 身を、教師と学習者が共有 し、双方の「鑑識眼」(見 る目)を鍛える。)

※振り返りを促す前に、子どもが自分の学習の舵取りができる力を育てる上で何をあらかじめ共有すべきかを考える。「学びの舞台」があってこそ見通しが生まれ段取りを立てる必然性が生じる。